

研修会報告

2022 年度滋賀支部主催第2回資格更新研修会

2022 年11月 13 日（日）

日本臨床発達心理士会滋賀支部主催

テーマ：「新版K式発達検査2020の結果をもとにした事例検討」

講師：清水里美氏（平安女学院大学短期大学部保育科教授）
小澤美早子氏（湖東広域衛生管理組合児童発達支援事業愛犬つくし教室）
岡村律氏（東近江市立八日市南小学校ことばの教室）

3人の方から研修会参加への感想をいただきました。ご多忙のところ、ご執筆をありがとうございました。

■ 2つの事例について3グループに分かれて話し合い、各グループの検討結果に対して、平安女学院大学の清水里美先生からコメントおよび発達支援全般に関するお話をいただきました。

事例経過とプロフィール用紙をもとに、相談者である子どもの発達課題とそれへの支援の手立て、支援目標までを含めて各グループで検討をしました。その際、結果としての通過・不通過だけでなく、検査時の子どもの様子および各検査項目の取り組み方についての情報をいただいたことで、子どもの実態がより推測しやすくなりました。清水先生のコメントで印象に残ったことは、支援でめざすのは「適応の問題を防ぐ」ことである、ということです。発達障害への支援ニーズの有無は、いわゆる発達の凸凹という諸特性の強弱ではありません。その諸特性のために集団生活における適応の問題が一定以上強く、かつ生活への差しさわりとして生じている状態か否かという問題です。支援者は、発達障害が「関係性の障害」であることをしっかりと理解した上で、検査結果（通過・不通過だけでなく、実際の子どものやりとりを通じて生成される、これまでの育ちとこれからの育ちについての仮説も含む）を日常生活の様子に落とし込み、その生活上の困難さに対して、環境である保護者や保育者をも巻き込む形で支援方法を考えていくことが大切です。

また先生から、発語がなくとも[2個のコップ][3個のコップ]が通過できているか否かが、相互的コミュニケーションの質を見るポイントであるなど、検査者として自分自身が日頃より実感していた事柄と重なるお話が聞けて、大変興味深かったです。最後には、保護者支援についてもお話をいただきました。子どもの障害の認識と受容は、一度解決したら終わりではなく、子どものライフステージによって波があるとのこと。確かに、支援級答申を就学前に受け入れられていても、数年後、保護者にお会いした時に、また違う子どもとの向き合い方になっておられることがあります。支援者として、その都度の保護者の心理状態に寄り添っていくことの大切さを改めて思いました。

甲賀市役所 高島 光恵

■ 5歳児と関わることが多い仕事をしています。今回の研修は、5歳児の事例検討ということなので参加しました。

研修会は、事例の資料・検査プロフィールをもとにお二人の先生からの丁寧な情報提供、検討するポイントが示された上でのグループワーク、講師の清水先生からの解説や的確なアドバイスと、大事なことが焦点化された内容でした。

3～4人のグループで、検査結果を読み取って事例の見立てをし、支援目標・手立てなどを検討して発表。コロナ禍で対面できなかった中でのグループワークは、参加者がそれぞれの立場で意見を話し合っ一緒に考えることができる貴重な時間でした。見立てや目標を考える際にほかの参加者の考えを直接聞けること、そして再度考えることは、自分の視点を広げる機会になりました。

各グループからの意見に対しては、その都度「検査結果を支援に生かすために一検査場面の行動観察から見立て仮説をたてる、日常の様子との関連を検討する、発達の問題のアセスメントと支援のアイデアを出す」という内容での講師の先生による解説やアドバイスがありました。このタイミングが絶妙で、まさに必要なことをそのときすぐに解説していただき、意見や考えが整理されて見立てや支援についての内容が深まりました。そして、検査を実施するというはどのようなことを改めて考えさせられることにもなりました。さらに、発達障害支援へのMSPAの活用や支援の度合いについてもお話がありました。検査からわかったことをどう支援に繋げていくか、保護者の心情への配慮も含めて誰にどう伝えていくかも重要なことであるというお話もしていただきました。

研修を通して、どれだけその子を知り、適切に関わるか、どう環境を調整するかが大事であり、それが子どもの課題を軽減することに繋がる。そのためにも検査場面の反応（通過のみでなく不通過の様子なども）を丁寧に捉えることが必要であることを教えていただきました。幼児期の課題を的確に見立てることの重要性を再度確認できました。

発達のアセスメントはその人をよりよく理解するということ。検査場面と日常場面との違いをどれだけ把握できているか。事例を提供してくださったお二人の先生のお話には事前の説明や検査中の反応の観察など、私では見落とすだろうきめ細かな配慮や見取りがありました。先生方のあたたかなまなざしを感じました。そういったこともK式発達検査の特徴のひとつではないかと思いました。

支部役員の方には、感染対策を含め参加者が研修しやすいようにいろいろな準備をしていただき感謝しております。講師の清水先生のお話は、検査や見立て、支援についてより深く考えることとなる内容でした。充実した研修会を企画・開催していただき、ありがとうございました。

(Y. N)

■受講者10名程度が小グループに分かれ、子どもの検査結果2事例のグループワークをしました。滋賀支部のスタッフの皆様のご進行により、アセスメントや支援計画と具体的手立ての検討を事例ごとに行いました。

「アセスメントは、その人をよりよく理解すること」であり、グループ協議では検査者からの事例報告とともに提示していただいた資料から読み取れる姿を意見交流しました。参加者の職種や立場に違いはあっても新版K式検査に関わる者ということで、交流では経験を踏まえた意見が出されました。

「自分だったら、この検査項目も実施するかなあ。」、「こんな姿は前回検査より成長されているね。この検査項目を通過している姿から、こんな成長を読み取れると思う。」等、子どもの姿の具体的な見取りとともに、「こんな支援が必要ではないか？」という手立ての検討をする機会ともなりました。

全体での意見交流では、各グループで挙げた意見を発表した後、講師より発達検査結果を支援に生かすために留意すべきこと、事例に関する助言、テストバッテリーや保護者支援に関わる情報等、貴重なお話を聞かせていただくことができました。講師の話より、検査場面の行動観察からの見立てについて、日常場面の様子と関連を検討する中で仮設の確認をすること、そして発達の問題のアセスメントと支援のアイデアにつなげることの大切さ等を学ばせていただきました。

コロナ禍で、集合型研修の設定も難しく、また、参加しづらい状況の中、感染対策を講じ、貴重な学びの場を設定していただいたスタッフの皆様と、当日の講話のみならず研修後に受講内容を確認できる資料も提供していただいた講師の先生に感謝申し上げます。今後も、このような学びの機会の設定を期待しております。ありがとうございました。

参加者：A